

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：27101
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21330041
 研究課題名(和文) 戦間期日本の協調外交の形成・崩壊過程の解明—新史料「内田康哉文書」に基づく分析
 研究課題名(英文) Research on Japan's Cooperative Diplomacy between the Great Wars: based on UCHIDA Yasuya Papers
 研究代表者
 小林 道彦 (KOBAYASI MICHIIHIKO)
 北九州市立大学・基盤教育センター・教授
 研究者番号：80211910

研究成果の概要(和文)：本研究は、主に第一次世界大戦終結(1918年)後から満州事変(1931-33年)にかけての時期に展開された、日本の国際協調外交の形成ならびに崩壊の具体的な過程を分析した。研究の遂行にあたっては、未公開の新出史料「内田康哉関係文書」(竜北歴史館所蔵)を活用した。本研究によって、史料の全面的整理・保全が完了し、史料自体の出版、公開の準備も整えることができた。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed why and how Japan's Cooperative Diplomacy was formed and declined between the two Great Wars, based on the new huge collections, UCHIDA Yasuya Papers. Our research group finished arranging and repairing the Papers, and is ready for publishing the Papers and helping the archives opening them to the public.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2010年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2011年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：日本政治外交史、国際関係史、戦間期、国際協調外交、外務省

1. 研究開始当初の背景

日本は、第一次世界大戦終結後から満州事変にかけての時期に、それまでの帝国主義的な勢力拡張政策を修正し、国際協調外交を展開した。この両大戦間期における日本の国際協調外交については、これまで多数の研究が積み重ねられてきた。

しかしながら、なぜ、どのようにして新たな外交路線が形成され、挫折したのかに関して、踏み込んだ分析は、依然として十分には行われていないように思われる。その一つの

大きな理由は、史料的制約にあった。とりわけ、対外政策の決定過程で最も重要な役割を果たした外相の個人史料が、体系的なものとなるとほとんど皆無であったことが大きい。

熊本県八代郡氷川町の竜北歴史資料館所蔵「内田康哉関係文書」は、この史料的制約を突破し得る新史料である。本研究は、本史料の整理、保全を行うと共に、その活用を通して、戦間期日本の協調外交の形成・崩壊過程を具体的に解明することを目指して構想されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の二点に要約することができる。

(1) 「内田康哉関係文書」の全面的な整理・保全を行うと共に、重要度の高い史料を選定し、翻刻・出版する。また、将来的に史料自体を公開するための態勢を整備する。

(2) 上記史料を活用しつつ、戦間期日本の協調外交の形成・崩壊過程を具体的に明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、両大戦間期の日本の政治・外交および同時代のアジア・太平洋地域の国際関係に関し、近年精力的に研究を進めている研究者を分野横断的に集め、研究分担者とした。また、本テーマに関する豊富な研究実績を有する高橋勝浩氏に研究協力者として参加頂いた。

(2) 内田家および竜北歴史資料館からは、研究遂行のために全面的な協力を頂いた。

(3) 痛みの激しい史料が多数存在したため、専門業者と協議しながら、史料の修復・保全措置を取った。

(4) 各分担者が連携しながら史料整理、共同研究を進めるため、東京、京都、北九州、熊本において定例研究会を開催した。

(5) 国立国会図書館憲政資料室、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所図書館などに所蔵されている関連史料の収集・分析にも努めた。また、イギリスの国立公文書館などにおいても関連史料の調査を行った。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の通りである。

(1) 「内田康哉関係文書」の整理・保全三年間の研究期間を通して、同文書の整理と保全作業を完了した。具体的には、以下のよう

- ① 文書全体を網羅する目録を作成した。
- ② 専門業者による補修作業および史料の保全措置を完了した。
- ③ 将来的な史料公開に備えるため、電子データの整理を行った。
- ④ 国立国会図書館憲政資料室と、史料のマイクロフィルムへの撮影、公開に向けた協議を行い、現地での調査も実施した。
- ⑤ 遺族のもとで新たに発見された史料の整

理、目録作成、デジタル撮影を行った。

(2) 資料集の公開の準備

「内田康哉関係文書」を学界全体の共有財産として広く一般に提供するため、資料集として公開する準備を進めた。

① 史料の整理と並行しながら、翻刻・校訂作業を進めた。

② その成果の一端は、「内田康哉日記 大正十一年」(『北九州市立大学基盤教育センター紀要』13号、2012年刊行予定)、「史料紹介 大正十二年内田康哉日記」(『軍事史学』第48巻第1号、2012年6月掲載予定)として刊行予定である。

③ 重要史料を網羅した『内田康哉関係文書』の出版準備を目下進めている。

(3) 実証研究

以上の史料調査を踏まえつつ、各自の分担に従って実証研究を進めた。

① 小林は、単著『政党内閣の崩壊と満州事変』を公刊し、戦間期の協調外交の崩壊過程を分析した。また、1930年代初頭の日本陸軍に関する論文を発表すると共に、近代の日中関係に関する論文集を編み、協調外交崩壊期の東アジア情勢に関する論文を発表した。さらに、明治・大正期の政軍関係についても分析を行い、児玉源太郎の評伝や上原勇作に関する論文を発表した。

② 川田、井口、森、高橋は、主に協調外交の崩壊期について、西田は主に展開期について、奈良岡は、主に協調外交形成の前提をなす第一次大戦期について分析を進め、それぞれ著書や論考を発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計19件)

① 森靖夫、統帥権をめぐるせめぎ合い、歴史読本、査読無、57巻1号、2012年、pp.72-77

② 高橋勝浩、本多熊太郎の政治的半生—外交官から外交評論家へ—、近代日本研究、査読無、28巻、2012年、pp.107-142

③ 小林道彦、児玉源太郎と伊藤博文・桂太郎、児玉源太郎と近代国家への歩み展(周南市美術博物館)、査読無、2011年、pp.8-11

④ 小林道彦、政軍関係史の中の上原勇作、上原勇作関係文書研究会編『上原勇作日記』(芙蓉書房)、査読無、2011年、pp.23-34

⑤奈良岡聰智、澤田廉三・美喜と岩崎家、昭和天皇(一)、法学論叢、査読無、169巻2号、2011年、pp.1-25

⑥奈良岡聰智、澤田廉三・美喜と岩崎家、昭和天皇(二)、法学論叢、査読無、169巻4号、2011年、pp.1-44

⑦奈良岡聰智、澤田廉三・美喜と岩崎家、昭和天皇(三)、法学論叢、査読無、170巻1号、2011年、pp.1-61

⑧森靖夫、事変を支えた新聞と国民感情—関東軍と満州事変—、歴史読本、査読無、56巻9号、2011年、pp.86-91

⑨高橋勝造、第一次大戦後における日本の対米宣伝構想について、国史学、査読無、203号、2011年、pp.81-113

⑩高橋勝造、内田康哉伝記編纂事業とその関係資料について、国史学、査読無、200号、2011年、pp.279-280

⑪森靖夫、陸軍を狂わせた人事システム、なぜ日本人は戦争へと向かったのか(上)(NHK出版)、査読無、2011年、pp.141-165

⑫小林道彦、三月事件と十月事件、北九州市立大学基盤教育センター紀要、査読無、7号、2010年、pp.41-56

⑬小林道彦、神風連の乱：ある「待罪書」をめぐる、北九州市立大学法政論集、査読無、38巻1・2号、pp.43-49

⑭小林道彦、危機の連鎖と日本の反応：朝鮮・満州・「北支」・上海 1919～1932年、小林道彦・中西寛編『歴史の桎梏を越えて：20世紀日中関係への新視点』(千倉書房)、査読無、2010年、pp.131-151

⑮奈良岡聰智、加藤高明と二十一カ条要求—第五号を中心に、小林道彦・中西寛編『歴史の桎梏を越えて：20世紀日中関係への新視点』(千倉書房)、査読無、2010年、pp.59-89

⑯奈良岡聰智、吉野作造と二十一カ条要求、吉野作造研究、査読無、6号、2010年、pp.10-23

⑰西田敏宏、東アジア国際環境の変化と日本外交、藤井謙治・伊藤之雄編著『日本の歴史—近世・近現代編—』(ミネルヴァ書房)、査読無、2010年、pp.218-244

⑱奈良岡聰智、加藤高明と岩崎家—駐英公使時代を中心に—、三菱史料館論集、査読有、

11号、2010年、pp.183-214

⑲奈良岡聰智、加藤高明と岩崎家—駐英大使時代を中心に—、法学論叢、査読無、166巻6号、2010年、pp.216-269

[学会発表](計4件)

①奈良岡聰智 (Sochi Naraoka) A New Look at Japan's Twenty-One Demands : Japan, China and the Anglo-Japanese Alliance during the First World War, International History Seminar (Institute of Historical Research, University of London), 2012年3月20日, University of London

②奈良岡聰智 (Sochi Naraoka) Kato Takaaki's observations on Britain : The Edwardian Era as seen by an Anglophile, Workshop on Tōzai Bunmeiron and Other Perspectives on a Unique Japanese Position in this World, 2012年3月30日, University of Oslo

③奈良岡聰智、イギリスからみた韓国併合、日本国際政治学会、2010年10月29日、札幌コンベンションセンター

④森靖夫、日中戦争の拡大—速戦即決論と総力戦論、日本国際政治学会、2010年10月29日、札幌コンベンションセンター

[図書](計8件)

①小林道彦、児玉源太郎—そこから旅順港は見えるか(ミネルヴァ書房)、2012年、pp.1-340

②井口治夫、鮎川義介と経済的国際主義—滿州問題から戦後日米関係へ(名古屋大学出版会)、2012年、pp.1-458

③川田稔、昭和陸軍の軌跡—永田鉄山の構想とその分岐(中央公論新社)、2011年、pp.1-343

④森靖夫、永田鉄山—平和維持は軍人の最大責務なり(ミネルヴァ書房)、2011年、pp.1-319

⑤小林道彦(中西寛との共編著)、歴史の桎梏を越えて：20世紀日中関係への新視点(千倉書房)、2010年、pp.1-308

⑥小林道彦、政党内閣の崩壊と満州事変：1918-1932(ミネルヴァ書房)、2010年、pp.1-399

⑦川田稔、満州事変と政党政治－軍部と政党の激闘－（講談社）2010年、pp. 1-268

⑧森靖夫、日本陸軍と日中戦争への道－軍事統制システムをめぐる攻防（ミネルヴァ書房）、2009年、pp. 1-299

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 道彦 (KOBAYASHI MICHHIKO)
北九州市立大学・基盤教育センター・教授
研究者番号：80211910

(2) 研究分担者

川田 稔 (KAWADA MINORU)
名古屋大学・大学院環境学研究科・教授
研究者番号：20115554

井口 治夫 (IGUCHI HARUO)
名古屋大学・大学院環境学研究科・教授
研究者番号：80288604

西田 敏宏 (NISHIDA TOSHIHIRO)
椋山女学園大学・現代マネジメント学部・
准教授
研究者番号：90362566

奈良岡 聰智 (NARAOKA SOCHI)
京都大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：90378505

森 靖夫 (MORI YASUO)
同志社大学・大学院法学研究科・助教
研究者番号：50512258

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

高橋 勝浩 (TAKAHASHI KATSUHIRO)